
「新約のきよめ」

第7章 きよめの現在時制

きよめがいつ得られるかについて議論がある

新生した人々の中にも生来の悪影響は残存する。しかしそれをたましいからまったく排除することは可能である。ということについては、ほとんどのクリスチャンが同意する。

しかしそれがいつであるかについては多くの議論がある。

- ・死の時であるという意見
- ・長期間の成長の後であるという意見。
- ・現在、瞬時的に経験することができるという意見。

われわれは、それは現在的、瞬時的経験であると信じる。

それは死が瞬時的であるというような意味で。
長時間瀕死の状態にあっても、死の瞬間があるのと同じ。

死がきよめるという見解について

すべてのクリスチャンは、天に入るためには全き聖化が必要であることを信じている。しかし、少なくないクリスチャンが、それはキリストにはできない、してくださらないと考え、死がそれをしてくれることを待望している。

しかしそれはあり得ない。

聖書は死を「敵」と言っている。もしきよめをもたらすものなら「敵」ではあり得ない。

死とは、肉体からのたましいの分離であるが、罪はたましいに宿っているものであり、死はたましいの中の罪を滅ぼすことはできない。(グノーシスの誤りに注意)

きよめるのが死でないとすれば、それは死の前でなければならない。
死の前が可能であるなら、なぜ今ではあり得ないのか。

神は死の前の瞬間にすべての罪から救うように、今救うことができるし、救いたいと願っておられる。

長期間の成長の後であるという見解について

それもあり得ない。

聖きは単純な信仰によって受けるもの。
私たちは聖きを自分で作り出すことはできない。

聖さは何ものかが取り去られることであるが、成長は何ものかが加えられること。
それは神の賜物であり、聖霊によってたましいにもたらされる超自然的なみわざ。
木は成長によって害虫を取り除けないように、たましいは成長して聖きに至ることはできない。

聖さと成長は、機能において異なる。
成長においてわれらは能動的、協同的であるが、
たましいの全ききよめは、新生と同じく受動的であり、経験させられること。
そのために働かせる信仰によって、即時的に受ける。

転機でもあり、過程でもあるきよめ

しかしきよめは、信仰によって獲得するある種の変わらない状態ではない。
きよめられた時の条件を継続的に順守することで維持できるたましいの状態。

きよめは過程を目ざした転機。

純潔の状態ではなく、純潔に保たれた状態。それは時々刻々の服従と信頼の結果。
今という瞬間にきよめることによって、つねにきよめる。
ヨハネ I 1の7の「きよめる」は現在進行形⇒きよめ続けることを表している。
継続的現在。

継続は信仰による現在の維持によって可能

それは信仰による現在を継続することによって可能となる。

それゆえ信仰の習慣を獲得する必要がある。

それが確立するには時間が必要であり、最初は明確な努力が必要。

しかしくり返すうちに次第に自然になり、容易になり、必然になる。

イエスの地がすべての罪からきよめるのは、私たちが光の中を歩むときだけ。

だから、光の範囲の広がりに応じて、私たちの献身も拡大されなければならない。

霊的健全さを維持するためには、時々刻々信頼し従うことが必要。